

製本のススメ

Vol. 74

未曾有の大災害といえる今回の地震 自然界の力には全く逆らえません。加えて原子炉の事故も起こり、日本という国全体が揺れています。世界中からの支援は嬉しいですね。願わくはこの善意を無駄なく活用できるシステムがいち早く整い、災害地の方々に届くとよいのですが。

今回は『ちょっと物知り』の話し

ススめも6年を過ぎ おそらく皆さんはベテランの領域に入っている事と思います。そこで今回は現代製本の全体像を眺めて見ましょう。

現在の製本技術(印刷も同様ですが)は明治に西洋の印刷技術が入ってきたところから始まっていますので「書籍」を基本とした作り方になっています。つまり本製本が印刷・製本の基準になっていると言ってよいでしょう。これらを簡略化して生まれた物が**仮製本(並製本・簡易製本・無線綴じなどと呼ばれています)**です。時々無線綴じと仮製本はどう違うのか?と聞かれることもあります、これは同じです。

さて本製本(最近では上製本が一般的)と仮製本 これの由来を知ると、本の作り方による役割分担が見えてきます。

製本の起源は中世ヨーロッパで書写した聖書をまとめることから始まります。これらを読みやすいように紐で綴じ、背中を固めて中身を作り、硬い表紙をつけて中身を保護したのです。その後 産業革命期に1枚の紙で表紙をつけることが出来るようになり、安価量産が可能になりました。これらは必要があれば厚い表紙に付け替えて、作り直す事が出来る、又は本製本になる前の製本という事で「仮製本」と呼ばれました

昭和の初め頃まではアンカットというタイプの本があり、本文の袋を切らずに、折り丁のまま仕上げ断裁無して製本完成です、まさに仮製本ですね。読み手が袋部分を切り、読み終わったものは、製本しなおして書庫に飾る物もありました。現在では 多くの製本加工が仮製本です。つまり表紙を付け替えればいつでも上製本にできるわけです。社内報や月刊誌などを1年間まとめて上製本に仕立て直す合本(ガッポ)技術は、その流れを今に残すものですね。



Teabreak

表紙の小口をカバーのように折り返す製本仕様を『ガンダレ』と呼びます。これは部首の二画にある【厂】から来ており、本を立て真上から覗くと表紙の小口がカバーのように折れている様子を表しています。上製にするほどではないが少し高級感が欲しい。カバーを掛けるほど費用が無いなどにはお奨めです。仮製本ならではの加工方法と言えます。

by (株) 井関製本